

## 関西学院における社会学の歩み(その2)

——大正15年から昭和23年ごろまで——

倉 田 和 四 生

はじめに——小松先生の着任

- 〔1〕 小松堅太郎教授の経歴
- 〔2〕 小松教授の研究分野と業績
- 〔3〕 大道安次郎教授の経歴
- 〔4〕 大道教授の研究分野と業績
- 〔5〕 関西学院の危機と小松教授の辞任  
むすび——二人の社会学者

### はじめに——小松堅太郎先生の着任

前稿(57号)で述べたように、関西学院において最初の専任の社会学者であった新明正道教授は5年間の在任ののち、大正15年4月から東北大学の助教授として転出された。その後任として大正15年5月7日、関西学院(専門部)の文学部社会学担当として就任されたのが小松堅太郎先生であった。

小松先生を後任に推されたのは新明先生自身であったらしい。関西学院専門部と後に東北大学で新明先生の教えを受けた大月直治名誉教授は、後年新明先生に直接聞いた話として「同氏(新明教授)が関学から東北大学に行かれた時、後任を希望された人が自薦他薦何人もいたが、新明先生は小松先生を推された<sup>1)</sup>」と述べている。このように新明先生は関学を去るに当って九州大学の高田保馬教授の助手をされていた小松堅太郎先生を後任に推されたわけである。

前稿で詳しく述べたように高田保馬教授は大正8年と9年の両年にわたって、日本人ではじめての社会学者として関西学院で集中講義をされた方であるが、新明先生の後任に高田先生の高弟が就任されることになったわけである。

### 〔1〕 小松堅太郎先生の経歴

小松堅太郎先生は山形県西置賜郡荒砥町の御出身である。大月名誉教授によると「先生は正規のルートを踏まれず、山形県で農業の手伝いをされながら、早稲田の講義録で中学の課程を終えられて後、明治大学を出られた<sup>2)</sup>」そうである。このように小松先生は草深い田舎の百姓の出で、文字通り苦学力行の方であられた。

早稲田の講義録で中学を終えた後、大正4年4月、明治大学予科に入学、5年7月に予科を卒業の後、1年間外国語専修に従事したあと、大正6年9月、明治大学法学部法学科に入学し9年7月に同学科を卒業された。

翌10年10月、当時東京商科大学の教授をされていた高田保馬先生に会い指導を受けることになる。小松先生はこの間の事情について著書『社会学論考』(昭和3年)の「序」の中で「かうしてとにかく社会学界に生れ出づることの出来たのは高田博士のお蔭である。が又、著者を社会学専攻の道にひき入れられた紀平博士がなかったならば私は恐らく永久に高田博士の御指導をもうけ得なかったであろう。大正10年の秋、紀平博士の御紹介により東京市外東大久保の御邸に高田先生をお訪ねして以来今日まで、絶えず懇切なる御指導を賜ったのである。私のものに何程かの取柄があるならば、それは皆高田先生の御指導の賜物に他ならない<sup>3)</sup>」と書かれている。小松先生にとって高田先生との出会いはまさに運命的な出来事であった。この時以来、高田先生との親密な師弟関係は昭和34年、小松先生が死去されるまで40年間にわ

1) 大月直治「学院の思い出——優れた学者 立派な講義——」関西学院『クレセント』18号 昭和16年6月 142-143頁

2) 同上書 142-143頁

3) 小松堅太郎『社会学論考』巖松堂 昭和3年

たって続いた。高田博士と小松教授との関係ほど美しい師弟関係は少ないのではなかろうか。学問の性格、研究の分野の類似性はもとより、学会における活動においても、この二人の学者ほど美しい結びつきを長い期間にわたって保持した例は稀であろう。

大正12年4月から明治大学特選研究生として研究をすすめるかたわら、13年1月から東京女子大学の講師も勤めた。

ところが他方、東京商科大学に教鞭を取っておられた高田保馬教授は病を得て、大正13年には東京商科大学を辞して、佐賀県の三日月村に帰郷し静養されることになった。しかし大正14年5月には九州大学法文学部から招かれ教授に就任された。そして同年10月、小松堅太郎先生を助手に任命されたのである。明治大学出身の小松堅太郎先生を九州大学の助手に任命するということは普通には考えにくいことである。このことによっても高田先生がいかに小松先生の能力を高く評価していたかが推察される。

他方、関西学院では新明正道教授が大正15年3月末をもって辞任され、東北大学へ転出されたため、後任を求めていた。これを知った高田先生は新明教授の後任として助手の小松堅太郎氏を推挙されたわけである。そしてすでに述べたように東北大学に移られた新明先生も多くの候補者の中から、高田博士の高弟である小松先生を推薦されたため、小松先生の採用が確定したわけである。

大正15年5月7日、関西学院（専門部）文学部の社会学担当の講師に就任された小松先生は6月には文部省の認可を受けている。さらに昭和3年4月には同教授に昇任された。さらに昭和7年には専門部が大学に昇格したため関西学院大学法文学部の社会学担当教授となった。

その後、約10年位いは平穩に学問研究に没頭されたが、16年末太平洋戦争が始まり、やがて戦局が苛烈となったため、関西学院はアメリカ・カナダのミッションボードからの財政的援助は受けられなくなった。さらに学徒出陣および学徒動員によって学生数が少なくなったため、極端な財政難におちいった。そこでやむなく神崎院長は教職員の人員整理を行なったが、そのため小松先生も

19年8月、関西学院を辞任し、山形県の郷里へ帰省された。

ところが昭和20年9月には高田保馬博士が所長を兼任されていた文部省の民族研究所の所員となられた。さらに21年4月には同志社大学文学部社会学科教授に迎えられた。しかし不運にも二年後の23年5月には教職追放にかかって辞任せざるを得なくなった。

このように職務上は不運なことが重なったが、学問研究はいささかもおとろえることなく続けられ、23年5月には法学博士の学位を得ておられている。幸い26年10月には追放が解除されて同志社大学法学部政治学科教授に復帰された。その後、7年7カ月法学部教授として勤務され、34年5月4日逝去されている。

このように、小松先生の経歴をふり返るとき、きわめて波瀾に富んだ生涯であったことがわかる。早稲田大学の講義録で中学の課程を終えたことから始まり、明治大学出身でありながら九州大学の高田保馬先生の助手になられたこと、19年間勤めた関西学院を辞職し、民族研究所を経て同志社大学に迎えられるながら、追放にかかれて辞任を余儀なくされたことなど、苦難に満ちた人生であったと言えよう。

このように小松先生の生涯をふり返るとき、先生の経歴にとって決定な影響を与えているのは高田保馬先生の存在である、九州大学の助手に任用されたことから始まって、関西学院への推薦、民族研究所への就任など、すべて高田先生の力があずかって大きかったことが知られる。高田先生と小松先生は、終生、強い絆で結ばれた師弟であった。

## 〔2〕 小松教授の研究分野と業績

### （1）研究分野

小松教授の研究分野はただ一つ（理論）社会学であったと言えよう。勿論、教授は社会学の外に民族論や国家論を研究されているが、小松教授にとっては「民族」も「国家」も社会的研究以外の何ものでもなかったからである<sup>4)</sup>。

先生の研究分野は、いま常識的に分類すると1)

4) 小松堅太郎『民族の理論』日本評論社 昭和16年 序1頁、小松堅太郎『国家学』関書院 昭和24年 序1頁

社会学, 2)社会科学概論, 3)民族論, 4)国家学の四つに成るが, 1)の社会学は更に社会学概論と社会構造論と社会変動論に細分される。

したがって次のように分類されよう。

(1) 社会学

①社会学概論 ②社会構造論 ③社会変動論

(2) 社会科学概論 (方法論)

(3) 民族論

(4) 国家学

「全体社会」, 「民族」, 「国家」は極めて深く関連した大規模な社会であるから, 小松先生の研究テーマは「大規模社会」の理論社会学的研究に集中しており, 関連の少ない分野に分散しているわけではない。すなわち先生は比較的純粋な社会学者であり, 理論家であったといえよう。

分野別に著書を整理すると

(1) 社会学関係

a) 社会学概論

- ① 社会学概論 日本評論社 昭和3年9月
- ② 社会学論考 巖松堂 昭和3年11月
- ③ 理解的社会学 岩波書店 昭和7年
- ④ 社会学 日本評論社 昭和9年

b) 社会構造論

- ① 社会構造の理論 日本評論社 昭和7年

c) 社会変動論

- ① 社会変動論 有斐閣 昭和28年

(2) 社会科学概論 (方法論)

- ① 社会科学方法論 関書院 昭和23年
- ② 社会科学概論 関書院 昭和24年

(3) 民族理論

- ① 民族と文化 理想社 昭和14年
- ② 新民族主義論 日本評論社 昭和15年
- ③ 民族の理論 日本評論社 昭和16年
- ④ 民族と世界史 一条書房 昭和18年
- ⑤ 民族 目黒書店 昭和20年

(4) 国家学

- ① 国家学 関書院 昭和24年

(2) 関西学院時代の著書

この中で関西学院在職中のものを年代別にあげると次の通りである。

- ① 社会学概論 日本評論社 昭和3年
- ② 社会学論考 巖松堂 昭和3年
- ③ 社会構造の理論 日本評論社 昭和7年
- ④ 知識社会学批判 大畑書店 昭和7年
- ⑤ 理解的社会学 岩波書店 昭和7年
- ⑥ 社会学 日本評論社 昭和9年
- ⑦ 民族と文化 理想社 昭和14年
- ⑧ 新民族主義論 日本評論社 昭和15年
- ⑨ 民族の理論 日本評論社 昭和16年
- ⑩ 民族と世界史 一条書房 昭和18年
- ⑪ 民族 目黒書店 昭和20年

これをみると小松教授は関西学院在職約20年間に11冊(『民族』は20年であるが, 実質的作業は在職中になされている)に及ぶ著書を出版されており, 社会学と民族論に集中している。時期的にみると, 昭和3年の『社会学概論』から昭和9年の『社会学』までは社会学の理論に集中しており, 四年おいて14年から20年までは民族論に集中している。ただ昭和13年ごろに『社会変動の理論』が出版される予定であったが, 支那事変の勃発など時局の急迫のため, 公刊出来なかったという事情がある<sup>5)</sup>。

このようにみると, 関西学院時代の小松教授はきわめて精力的に社会学と民族論の研究に没頭し, すぐれた業績をあげておられることが知られよう。

(3) 研究業績

大月直治名誉教授は小松先生の研究態度について次のように書いておられる。すなわち「小松先生は九州大学で高田保馬先生につかれた。先生に社会学をやるにはまずジンメルの *Soziologie* を読み終えることを慫慂された。血の出るような思いをされながら, それを一年かかって読破された。ある時, 私はこの本を見せていただいたが, どのページにも先生の書き込みがあり, 時に賛成, またあるところではジンメルに対する反駁があり, 一字一句もゆるがせにせず, そこに自分の

5) 小松堅太郎『民族と文化』理想社 昭和14年 序1頁

考えをしるしておられた。学者の研究の恐ろしさ、厳肅さに心を打たれたことを思い出さざるを得ない<sup>6)</sup>と述べている。

小松先生は研究一筋に打込まれた学者らしい学者であった。次に先生の研究業績にふれてみよう。

### 1) 社会学関係

まず社会学関係として、最初の①『社会学概論』、②『社会構造の理論』をとりあげてみよう。

#### ① 『社会学概論』(昭和3年)

小松先生は大正15年5月に就任されているが約2年後の昭和3年9月に最初の著書『社会学概論』を出版されている<sup>7)</sup>。本書は日本評論社が「社会科学叢書」の第9編として出版したもので、第8編には高田保馬博士が『経済学』を出版されており、続刊には新明正道教授も『独逸社会学』を出版されることになっている。

文庫版の202頁であるからハンデーな小著であるが、小松先生の社会学の体系と研究領域をほとんどカバーしている。

本書の構成の基本を示すと、

#### 第一編 社会学論

##### 第一章 社会学学論

###### 第一節 総説

###### 第二節 社会学の対象

###### 第三節 社会学の方法

##### 第二章 社会本質論

###### 第一節 序論

###### 第二節 自然科学的概念の規定

###### 第三節 精神科学的概念の規定

#### 第二編 社会構成論

##### 第一章 社会結合論

###### 第一節 情的結合論

###### 第二節 目的結合論

##### 第二章 結合助成論

###### 第一節 社会意識論

###### 第二節 社会組織論

#### 第三編 社会静態論

##### 第一章 社会関係論

##### 第一節 社会関係論

##### 第二節 社会構象論

#### 第二章 社会体制論

##### 第一部 社会の水平的構造

###### 第一節 社会の形態論的分類

###### 第二節 全体社会の構造

###### 第三節 部分社会間の関係(其一 国家間の地位)

###### 第四節 部分社会間の関係(其二 競争的形態)

##### 第二部 社会の垂直的構造

###### 第一節 階級社会の構造

###### 第二節 無階級社会の垂直的構造

#### 第四編 社会動態論

##### 第一章 形式変動論

###### 第一節 社会の分化

###### 第二節 社会の合理化

##### 第二章 内容変動論

###### 第一節 社会意識の変動

###### 第二節 文化の変動

となっているが、これはその後の小松社会学で取扱う研究領域がほとんど含まれている。

小松先生は九州大学において高田保馬先生に師事し助手を勤めていたのであるから、高田先生の影響を受けていることは当然であるが、勿論、独自の社会学の体系を本書で展開しており、これは後の著書にもほぼ一貫して引継がれている。すなわち同年の11月に出版された『社会学論考』の構成はこの『社会学概論』と全くといってよい程類似していることは当然であるが、昭和7年の『社会構造の理論』においても、9年の『社会学』においても同様である。

小松先生は本書の「序」において「学峰は峻険であり、その道程は多難である。その山嶺に攀るためには、ただ既存の学説へ追隨するだけでは全く不十分である。吾等は徒らにお経の空読みをなすを以て能事とすることなく、既存のお経の鋭利なる批判に向わなければならぬ。学の生命は批判にある。それを措いて徒らに既成の法式の暗誦に趨

6) 大月直治「学院の思い出——優れた学者 立派な講義——」関西学院『クレセント』18号 昭和60年6月 143頁

7) 本書序(2頁)によると『社会学概論』をこの本の前に出版されているようであるが、学院図書館になく筆者は未見である。

るならばその人は草寺の凡僧と異なる所なく、また無能なる漢学の註釈師と扱ふ所はない<sup>8)</sup>」とし、批判精神を強調されている。

本書は小著であるにもかかわらず、概論として広い範囲をカバーしているため学説の紹介に多くのスペースが割かれているが、自説の展開も随所になされている。例えば第一章 社会学学論の第二節 社会学の対象の第一項 社会関係の内容のところ、結合上位説を批判し結合と分離とは対等の地位において、社会的関係として社会学の対象となり得ると結論づけている<sup>9)</sup>。

次に第三編 社会静態論、第一章 社会関係論、第一節 社会関係論の第四項 総合社会の諸形態の中で「共益社会」なる概念を提起している。これは高田先生をはじめ一般化している共同社会対利益社会という捉え方に満足せず、新しく提起されたもので小松教授独自の概念である。

このように本書は小著ながらも社会学の基本問題がほとんど取り上げられ、しかも批判的吟味や自説の提起もなされた好著である。

## ② 『社会構造の理論』(昭和7年)

小松教授は昭和3年11月『社会学概論』の内容をさらに詳論した『社会学論考』を出版している。この著書は恩師高田保馬博士に捧げられたもので、450頁を越える大著である。自説をさらに大胆に展開しているが、ここでは取上げて論ずる余裕がないので割愛したい。

それから4年おいて昭和7年『社会構造の理論』を出版された。本書は500頁を越える大著であるが、先の『社会学概論』や『社会学論考』で示された小松社会学の中で、ことに社会構造の部分に詳論したものになっており、小松理論の特徴がより鮮明に論述されている。

まず目次の大要を示すと、

### 第一章 総論

### 第二章 社会の純型論的考察

#### 第一節 社会成素の極限理論

#### 第二節 社会の純型

##### 第一款 共同社会の理論

第二項 共同社会の結果
第二款 利益社会の理論
第三款 共益社会の理論
第三節 各社会に作用する諸原則
第三章 社会の形態論的考察
第一節 社会の種々の形態
第二節 社会集団の態様
第三節 社会の経済的構造と集団形態
第四節 社会集団の種類
第四章 社会の構造論的考察
第一節 社会の水平的構造
第一項 全体社会
：
第五項 部分社会間の関係
第二節 社会の垂直的構造

となっている。

小松教授は社会構造の理論を三つの部分に分けている。その一は社会の純型論的考察であり、二は社会の形態論的考察、三は社会の構造論的考察である。純型論は人々の態度を決定する動機の把握によって彩色された社会の姿であり、共同社会や利益社会がこれである。

これに反して形態論は既成社会の外廓的姿態の分析と総合による把握で、社会集団の形態や種類による分析である。ここにきわめて精緻な社会集団の分析がなされている。

「序」によると、小松先生が本書の中で、自己の見解を赤裸に示した論点は、①共同社会の結果、②共益社会の理論、③社会の経済的構造と集団形態、④全体社会、⑤部分社会間の関係、であると述べている。

この中でも、ことに②の共益社会と④の全体社会論が重要である。

小松教授は共益社会の理論は「全く私の構想によるもので、最も誤謬の多いものかも知れない。しかし、私は従来の人々の学説に含まれた難点を指摘することによって兎も角も之れを一つの独立の型としたものであった。幸いに社会学界の議論の的ともならば私一人の為ばかりではない」<sup>10)</sup> と

8) 小松堅太郎『社会学概論』日本評論社 昭和3年 序3頁

9) 同上書 18頁

10) 小松堅太郎『社会構造の理論』序2頁

述べている。そして高田博士の利益社会は打算熟慮を本質としながら、他方愛憎の極めて乏しい姿をとると、いわば二元論的に説明しているが、この愛憎の極めて乏しい姿こそむしろ「共益社会」であると主張している<sup>11)</sup>。

次に全体社会については「従来の高田社会学に対して全く反対の立場をとることに成った。かの形式的見解に対して、著しく現実科学的な見解をとるに至ったのである。既にハンス・フライヤー其他の人々の示唆多き著述に接した私は、改めて全体社会の構造を見直す必要に迫られたからである<sup>12)</sup>」という。

高田博士は「全体社会は単に結合のみの総体であるとせられ、少なくとも此の意味において抽象的に理解せられていた<sup>13)</sup>」が、これを大きく変化させ「然れども斯かる解釈を根拠とする時は、実際に生ける社会をそのままに把握することは絶望的に困難となる。吾等は発展過程に在る社会の一断面を直視する際に与えられる社会の全体を立体的に且つ奥行をも含めて把握することを、重大なる科学的、然り現実科学的任務である<sup>14)</sup>」とし、むしろマッキーバーのコミュニティに強く関心を示しながら「全体社会とは比較的封鎖的な範囲域内に具体的に存する結合及び分離の錯綜せる網の総体<sup>15)</sup>」と規定している。

新明教授は『社会学辞典』の中で、小松教授について「氏は大正末期ドイツ社会学および高田保馬博士の影響下に社会学の構想に着手して、一応その完成した体系を『社会構造の理論』において示したが、それは大局的には高田保馬博士の見解の最も忠実な発展と評し得るものであった。勿論、氏は若干の点において博士の立場に修正を加えている。高田博士が社会学を結合の学となしたのに対して、氏がこれを社会関係の学と定義し、結合のほかに分離をもその考察の範囲に包括せしめたのは、その最も著しい点である<sup>16)</sup>」と述べ、さ

らに「氏は社会関係の分析から進んで社会統体の形態的分類およびその構造を問題とし、きわめて論理的な組織を形成しているが、氏の特異の見解としては、関係分析において、共同社会と利益社会のほかに共益社会の概念を提出し、これを以て前両者の統合的典型たらしめている点<sup>17)</sup>」を指摘している。

このように見てくると、小松先生は高田先生の影響を強く受けているものの、極めて重要な点、①結合上位から社会関係へ、②共益社会の概念、③全体社会の規定において、高田社会学をつき抜けて、ユニークな理論体系を示したすぐれた研究者であったといえよう。

## 2) 民族論

### ① 『民族の理論』(昭和16年)

昭和3年から昭和9年までの間に理論社会学の研究に没頭し6冊の大著を出版された小松教授は、昭和10年ごろから民族論の研究に従事し、昭和20年まで6年間に5冊の関連した著書を刊行した。きわめて精力的に活動されたことがうかがわれる。その中で最も評価の高い『民族の理論』を取り上げてみよう。

この書の「序」の中で小松先生は自からの民族論について「だがここで私が云はうとする民族の研究は民族の社会学的研究であり、純理論的研究である。社会学的といふことは、人間の社会的関係を指導理論としてそれから社会的、文化的諸事象を理論的に把握することであるから、従って民族の社会学的研究といふこともこの社会的関係の観点から民族の姿を解剖していくことに外ならない<sup>18)</sup>」とのべている。ここに述べられているように、小松先生にとって民族の研究は民族の社会学的研究に外ならない。

本書は民族に関する理論的な研究として評価のきわめて高いものであるが、その目次の大要をあげてみると、

11) 小松堅太郎『社会構造の理論』225頁

12) 同上書 序2頁

13) 同上書 452頁

14) 同上書 452頁

15) 同上書 451頁

16) 新明正道編著『社会学辞典』河出書房 昭和19年 781頁

17) 同上書 781頁

18) 小松堅太郎『民族の理論』日本評論社 序1頁

## 第一章 欧州に於ける民族諸概念

## 第二章 ドイツの及びフランス的民族理念

## 第三章 民族の本質に関する諸学説

## 第一節 客観説

## 第二節 主観説

## 第三節 民族の本質に関する私見

となっている。

本書の中での重要な指摘および特異な論点として、①フォルクとナチオン、②ドイツ的およびフランス的民族理念、③民族の本質に関する私見について一言しておこう。

## ① フォルクとナチオン

ドイツの民族論で問題とされてきたフォルクとナチオンについては同視説と区別する説がある。さらに同視説の中でも発展段階とみる考えでは、フォルクは本質共同社会であるが、これが発展した形態のナチオンは政治的意思共同社会とされる。

またフォルクは自生的言語ならびに文化を共有するが、ナチオンは国家の作為に基づいて、言語ならびに文化の同一化がはかられたものである。したがって国家の形成とその作用があつてフォルクからナチオンに発展するものと考えられる。

## ② ドイツ的及びフランス的民族理念

フランス的民族理念はフランス革命によって獲得した自由と平和と平等の理念によって形成された自由主義的民族理念であり、ドイツ的民族理念は超個人的、客観的文化共同社会又は歴史的運命共同体を求めるものである。

## ③ 民族の本質に関する私見 (小松説)

民族の本質に関する意見には客観説と主観説があるが、小松先生は、これらを詳細に検討した上で、これらはいずれも一面的で満足出来るものではないとしている。

そして民族の本質の問題は民族結合の事実を捉えるものでなければならないが、客観説の主張す

る客観的契機自体は決して人々の結合そのものではなく、結合をもたらす条件にすぎない。言いかえると条件としての客観的素質と結びついて人々の間に結合が生まれるとき、その結合が民族的結合となる<sup>19)</sup>。

次に主観的要因(民族的感情)についてみると、種族的闘争の反復によって生まれた種族的偏向が、民族に継承されて民族的優越の傾向あるいは「民族的偏向」が形成される。そしてこれに重大な刺戟(血の優越意識の毀損、伝統の冒瀆など)が加わることによって民族感情は興起すると考える。このように客観的条件に主観的要因が複雑にかみ合つて、現実の民族結合が生まれ、民族的偏向が刺戟されることによって民族感情が生み出される。そして更にこれが民族結合を強めると、いうのが小松先生の考えである<sup>20)</sup>。

小松教授の民族の理論は単に客観的要因と主観的要因を指摘するだけの論とは異なつて、二つの要因の結びつきおよび民族感情の興起について、極めて精緻でダイナミックな過程の分析がなされておられ、説得力をもつたものとなっている。

新明教授も『社会学辞典』の中で「氏は近年にいたつて民族概念の検討に殆んど全力を傾注して来た観があり、これを主題とした著作数冊を出しているが、そのなかで最も主要なものは『民族の理論』であつて、これは複雑多岐な民族観念の闡明として類例なき精密さを以つて特徴づけられている<sup>21)</sup>」と極めて高く評価している。

以上、小松教授は社会学の分野においても、民族の社会学的研究においても、きわめてすぐれた研究業績を残されている。

大正・昭和にかけて最高の理論家であつた高田保馬博士の膝下から出発され、高田理論を展開された小松教授ではあつたが、いくつかの点において恩師の高田先生を越えた業績を残されている。それが小松先生の『社会構造の理論』や『民族の理論』であり、後の『社会変動論』<sup>22)</sup>である。

19) 小松堅太郎『民族の理論』日本評論社 昭和16年 249～250頁

20) 同上書 249～332頁

21) 新明正道編著『社会学辞典』781頁

22) 小松教授の業績のなかで「社会変動論」についても述べるべきであるが、その刊行は本稿で取扱つた時期よりずっと後であり、また紙幅が残されていないので割愛せざるを得なかつた。

〔3〕 大道安次郎教授の経歴<sup>23)</sup>

## (1) 敦賀から関西学院へ

## (1) 生い立ち

大道安次郎先生は、明治36年5月1日福井県敦賀市相生町に生まれた。生家は代々「孫助」を名のる海産物問屋であった。

先生は海産物問屋の六男に生まれた。幼少の頃からひとときわ秀才の誉が高かったが、家が海産物問屋であったためか敦賀商業学校に進んだ。その頃から先生は学科の成績が抜群であっただけでなく、運動においてもすぐれた能力を持っていた。ことに剣道とテニスが得意で、剣道部のキャプテンを務め、両方とも全国大会に出場されたとのことであった。このように先生はいわゆる文武両道に秀いでた学生であった<sup>24)</sup>。

## (2) 関西学院へ

先生は大正12年4月、関西学院の高等商業学部へ進学された。それには四つの契機があったと先生は語っている。その第一は敦賀商業の本科二年生の頃、関西学院出身の井上晃先生に英語を教わったが、この先生から発音をやかましく教えられた。井上先生を通して初めて英語に強い関西学院を知ったのである。

次に先生は敦賀商業時代に賀川豊彦の教会に通って若き魂のよりどころを求められたそうである。この経験が先生をミッション・スクールへ向かわしめたのであろう。第三に先生はことの外、音楽を愛好された。敦賀商業時代に聞いた関西学院のグリークラブの四部合唱に魅了されたのが進学の動機であった。

第四はテニスを取り持つ縁である。先生は神戸高商で開催されたテニス大会に参加されたが、試合の前日、関西学院のテニスコートで練習を行った。その時のミッション・スクールらしい品格を備えた学院のキャンパスの印象が先生の心を捉え関西学院に向かわしめたのである。

## (2) 高等商業学部時代

大道先生は大正12年4月、関西学院高等商業学部へ入学した。この時期にその後の運命を左右す

る重要な出来事が起っている。それは新明正道先生との出会いであった。

大道先生が高等商業学部の2年生（大正13年）の時、文学部教授の新明先生が高等商業学部の社会学を兼任された。これが大道先生にとって新明先生との最初の出会であった。答案を読んだ新明先生は直ちに学生大道安次郎の才能を見抜き、自宅にも遊びに来るように勧めたので、新明先生宅にも出入りするようになった。またその後、文学部の新明先生の社会学も受講し、社会学への関心を深めた。

この時期には新明先生からジンメル形式社会学の外、フィアカントやフォン・ウイゼの学説を学んだが、同時にマッキーバーの『コミュニティ』についても教えられ、その翻訳をすすめられたという。後に大道先生は米国コロンビア大学のマッキーバーのもとに留学することに成る。

## (3) 九州大学時代

昭和2年3月、高等商業学部を学校始まって以来の最優秀の成績で卒業した大道先生は、九州大学の高田保馬先生のもとに入学した。というのは、大道先生が高商の3年の終わりに、新明先生が東北大学へ移られたので、これを慕って新明先生のもとに進学することを考えたが、すでに新明先生のヨーロッパ留学が決まっていたため、先生の紹介状を持って九州大学の高田保馬先生のもとに入学することに成ったわけである。

大道先生はすでに高商時代に高田保馬先生の『社会学原理』（大正8年）、『社会学概論』（大正11年）、『社会関係の研究』（昭和元年）などの著作に目を通していたので、高田先生は著作を通してよく知っていたが、九州大学に入学して直接教えるを受けることに成ったわけである。

高田先生のもとで、1年生の時にはデュルケームの『社会学的方法の基準』を、2年生の時にはテンニースの『ゲメインシャフトとゲゼルシャフト』をテキストにして演習がなされた。受講生は2、3人で、研究発表はいつも大道先生が引受けさせられたそうで、文字通りマンツーマンの教育を受けたことになる。卒業論文にはジンメルを

23) 大道教授については、拙稿「大道安次郎博士の人と業績」『関西学院社会学部紀要』第55号において述べた。この部分は、それを要約したものである。

24) 「生き学びそして教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院 昭和60年6月 102頁



テーマに選んでまとめたが、高田先生の勧めでマックス・ウェーバーやマックス・シュラーなどについても研究を深めた。

さて大道先生が三年生になった頃、母校関西学院高等商業学部長の神崎先生から、経済学も受講するように指示を受けたため、急拠、経済学も履習して、昭和5年3月に九州大学を卒業した。

#### (4) 高等商業学部への就任のいきさつ

大道先生は九州大学卒業後、直ちに昭和5年4月から母校の関西学院高等商業学部の教壇に立つことに成ったが、それには次のようないきさつがあった。当時の高等商業学部長であった神崎驥一先生は、かねて学院出身者から教壇に立てる者を育成したいと考えていたが、東北大学へ去る新明先生に、そのような可能性のある学生はいないかと推薦を依頼したところ、新明先生は「大道君」ならと推されたそうである。要するに、当時の学部長の神崎先生と新明先生およびゼミ指導の中沢先生などの配慮によって大道先生の母校への奉職は実現したものである。

ところで大道先生は九州大学では社会学を専攻したが、当時、関西学院の文学部では、先に述べたように、新明先生の後任として高田保馬直系の小松堅太郎教授が「社会学」を担当されていたので、高等商業学部で採用されることに成った。九州大学の3年生になって急に経済学を受講させられたのはこの為であった。

#### 〔4〕 大道安次郎教授の研究分野と業績<sup>25)</sup>

大道先生は極めて幅広い研究活動をされた方であった。大雑把に整理しても「経済学史」、「アメリカ社会学(史)」、「日本社会学史」、「高齢者・病院の研究」、「都市研究」の五つの分野にわたっている。しかし本稿で取扱う時期の研究は「経済学史」にほぼ集中していた。

##### (1) スミス研究へのアプローチ

昭和5年4月、母校関西学院の高等商業学部の講師に就任された。ところが数年後、先生に「経

済学史」を担当するように要請された。そこで講義の準備のため、参考書に目を通していううちに堀経夫先生の研究業績に強い感銘を受けたので、早速、当時の大阪商大に堀先生を訪ね、堀先生の研究会に参加することに成った。

研究会のメンバー中には、すでにフランス経済学史を研究されている岡本博之氏とドイツ経済学史を研究されている三谷友吉氏がいたので、大道先生は「イギリス経済学史」を選び、まずアダム・スミスから始めることに成った。これが昭和10年頃のことである<sup>26)</sup>。研究会は毎週開かれ、大道先生は月1回スミス経済学について研究発表を行い、堀経夫先生の懇切丁寧な指導を受けた。

ところで大道先生は、九州大学を卒業し関西学院に就任した後も東北大学の新明先生と連絡を密にして、その影響を受けていた。新明先生は二年間のヨーロッパ留学中、当時隆盛であった知識社会学を研究して昭和6年5月に帰国されたが、昭和7年には留学の成果を『知識社会学の諸相』として出版された。さらに昭和10年には『現代知識社会学論』を編集して公刊されたが、その第2章「デュルカイムの知識社会学」は、大道先生が執筆している。このことから明らかなように、大道安次郎先生は新明先生の影響を受けながら、知識社会的思考法を修得していたことがわかる。さらに「堀研究会」に入って研究しはじめてから2年位たった昭和12年から13年にかけて大道先生は東北大学の新明先生のもとに内地留学をしておられる。この時期には新明先生はヨーロッパの社会学の研究のみでなく、新明社会学——行為関連の立場、総合社会学——の構築に取りかかれた時期であり、大道先生もその影響を受けて帰った。

東北大学から帰ると、再び「堀研」に通ってスミス研究を続けたが、その成果が昭和15年の『スミス経済学の生成と発展』(日本評論社)である。この著書はスミス研究にこれまでとは異った新しい光を当てて、新機軸を開いた画期的な研究として高く評価された。大道先生はこの書物によって高島善哉、大河内一男両教授とならんで戦前のス

25) 大道先生は昭和61年1月11日、心不全のため争逝された。83才であった。私は恩師を追悼して一文をまとめた。倉田和四生「大道安次郎博士の人と業績」関西学院大学社会学部紀要第55号、昭和62年7月、この節はこの論文から引用している。

26) 『経済学の研究と教育の50年』(堀経夫博士喜寿記念事業委員会編)昭和48年 572頁 743頁

ミス研究の三羽鳥と呼称されるように成ったが、本書は高島教授の『経済社会学の根本問題——経済社会学者としてのスミスとリスト』よりも1年早く、大河内教授の『スミスとリスト——経済倫理と経済理論』よりも3年も前に出版されている。

先生はスミス研究を三部作にまとめる計画を立てた。第1部は「スミス自身に即して」彼の経済思想が『国富論』にまで到達した経過をたどったもので、これが『スミス経済学の生成と発展』(昭和15)である。次に第2部は生成過程の地盤と思想的背景とを系譜的にたどったものであり、第3部は『国富論』が欧米や日本などの経済学にどのような影響を与えたかを探ることを目指したものであったが、この第3部は未完に終わっている。

さらに著書の外にこれに関連する3冊の翻訳を出版している。

- (1) バジョット『国民の起源』昭和17年  
慶応書房  
(改題)『自然科学と政治学』昭和23年  
岩崎書店
- (2) ファーガスン『市民社会史』昭和23年  
白日書房
- (3) スミス『国富論の草稿その他』昭和23年  
創元社

次にこれらの著作について論評してみよう。

## (2) 研究業績

### ①『スミス経済学の生成と発展』(昭和15年)

まず『スミス経済学の生成と発展』は三部作のなかで「専らスミス自身に即して」彼の内部において経済思想がいかに生成し発展したかを探るという角度から研究されたものである。

第1章では、道德哲学の根本精神を明らかにすると同時に、経済学がどのような位置を占めているか。第2章では道德哲学が経済的企図にどのように作用しているか。第3章では経済学の体系に道德哲学がどのように浸透しているか。第4章では専ら経済学の領域において、資料——「エジンバラ講義」、「グラスゴー講義」、「国富論の草稿」——にもとづいて経済思想の生成・発展をあとづけている。最後に第5章ではこれらの考察を通して、そこに見られる発展の傾向を「道德哲学より

経済学へ」、「断片的より体系的へ」、「消費論的体系より生産的体系へ」、「政策中心より理論中心へ」、「道德哲学より経済学へ」の五つに概括して特徴づけている。

本書は、①膨大な資料のなかから適切なものを選び出す直観力的能力、②ギリシャ哲学から道德哲学へ、さらに経済学への発展のあとづけ、③発展に見られる特徴づけの見事さ等において独創的な成果を示している。

この著書は先生の処女作であるが、スミス研究の中でも最も迫力に満ち、独創性に富んだ業績として高く評価されている。

### ②『スミス経済学の系譜』(昭和22年)

次に戦後に惜しまれて逝った「三木清」に捧げられている『スミス経済学の系譜』(昭和22年)は「スミス経済学の生成過程をその地盤と思想的背景とに結びつけて系譜的に考察する<sup>27)</sup>」ことを目指している。

本書は、大きく前編と後編に分かれている。前編の第1章ではスミスの道德哲学体系を全体として問題にし、その系譜と地盤とを明らかにした。次に第2章では道德哲学体系の第一部門である自然神学の系譜をたどり、第3章ではその第2部門である倫理学の系譜を明らかにし、第4章では第3部門である法学の系譜をたずねた。これは前著の1, 2, 3章に対応している。第5章では道德哲学から経済学が独立し、スミスが道德哲学者から経済学者へ変身していくプロセスを辿り、経済学思想の発展の諸方向を系譜と地盤とに結びつけて考察している。

後編では、スミス経済学の根本的性格の究明とその系譜ならびに地盤の究明につとめている。後編の第1章では「経済人の誕生」、第2章「個人主義の論理」、第3章「見えざる手の形而上学」、第4章「自然的自由の制度」、第5章「スミス経済学の国民性」となっている。この中で考察の焦点を専ら系譜と地盤の探究におき、そのなかから「スミス特有の社会理論」を摘出し、「国民主義者スミス」を描き出したところにこの著作の特色がみられる。

本書の研究手法には、より明確に知識社会的な方法が用いられている点が注目される特色であ

27) 大道安次郎『スミス経済学の系譜』実業の日本社 昭和22年 序1頁

る。

本書を脱稿したのは昭和19年の春であったが、戦争が激しくなって出版できず、戦後、22年になってようやく出版された。戦争末期、空襲が激しさを増すなかで、焼失をおそれ、デュプリケートを作って一部は自宅に、一部は神学部の地下室に保存していたそうである<sup>28)</sup>。

本書は後に早稲田大学の久保田明光先生のもとに学位請求論文として提出され、経済学博士の称号(昭和26年7月)が与えられた。

これらの著書の外に、イギリス経済学史研究に関連して3冊の翻訳がなされているが、これらはいずれも重要な古典とされているものである。したがって昭和15年から23年までの8年間に著書2冊、翻訳3冊の計5冊が出版されている。先生がこの期間にいかに精力的に研究されたかがよくうかがわれる。しかもこれらの研究は、いずれも経済学史に残るすぐれた業績である。

筆者は大道先生の全生涯の研究業績のなかでもスミス研究こそ最もすぐれた成果だと考えている。ただ惜しむらくは最初に構想された3部作のうち第3部(スミス研究の国際的影響)が未完に終わったことである。

先生は昭和61年11月、最後の論文を『社会学部紀要』53号に発表された。それは「学説史研究の方法」と題するものであったが、これは先生が生涯を通じて追求した学説史の研究を総括するような論文であった。これをみると、先生の研究は、学説史の研究に始まって学説史に終わっているのであるまいか。

## 〔5〕 学院の危機と小松教授の辞任

### (1) 学徒出陣と学内組織の整理統合

戦争の長期化と戦線の拡大によって、国内は総力戦体制の確立へと向けられ、学生の徴兵延期の特典も撤廃されるにいたった。

すなわち昭和18年10月20日付「昭和18年徴兵検

査規則」が公布せられた。このため学院の大部分の学生も繰上げ卒業または休学のまま臨時徴兵検査を受け、陸海軍のいずれかに入隊した。いわゆる「学徒出陣」である。

そのため、学院には兵役に服し得ないきわめて少数の学生のみが残った。学生の授業料を財源とする私立大学の存続が危ぶまれる事態が到来したわけである。さらに加えて文部省は在学生の徴兵延期の措置の廃止に伴なって学校組織の改編を要望して来た。すなわち18年10月20日付で文部省は「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ関スル件」として、①大学を専門学校に転換し教育内容を整備する、②入学定員を二分の一程度とする、③専門学校を整理統合する、④理料系へ転換することを要請して来た<sup>29)</sup>。

これを受けて関西学院では11月1日の理事会において慎重な協議を重ねた結果、①大学は存続に努力する、②専門部と高等商業学校は新学部とする、③理工系学部を新設する、④大学部の縮小に伴う処置として総合研究所を設ける、という方針を定めた<sup>30)</sup>。

そして新年度(19年)の新体制を次のように定めた。

- ① 昭和19年度の新入生は  
大学法文学部 80名、商経学部募集停止
- ② 専門部文学部と高等商業学校は統合して専門学校政経科とする。定員200名  
理工科を併設する。
- ③ 国民生活科学研究所を設置する。
- ④ 教務部、訓練部、財務部の三部長を設け、各部の教務、学生訓育その他の事務を統合する<sup>31)</sup>。

この重大な改組については19年2月17日、全教職員が図書館に集合した席上で理事代表の曾木理事より発表された<sup>32)</sup>。

### (2) 教職員の人員整理と配置転換

同時にこの全体集会の席上で、この組織改編に伴って教職員の人員整理、その配置転換が必要で

28) 「生き学び教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院 昭和160年6月 102頁

29) 『関西学院70年史』1859年 187～188頁

30) 同上書 189頁

31) 同上書 190頁

32) 同上書 190頁

あるから、一応全員の辞表を提出するように要望された。

学院70年史には「当時は非常時の空気がこのような非常措置を敢行させたのである。まことに悲痛な改組であった。学院の過去の長い伝統をになった学部が廃止ないしは統合された。その上、久しきにわたって学院のために貢献した多くの教職員も退職の止むなきに至った。退職者は総数32名の多きに達した<sup>33)</sup>」ただし、実際上の退職にはかなりの時間を必要とした。

(3) 国民科学研究所

昭和18年3月の臨時理事会では、全学院を包括する総合研究所を設ける方針を決定していたが、学徒出陣によって学生が少なくなった為、研究所の設置が早まり、19年度から開設することに成った。名称は「国民生活科学研究所」とし、2号館を用いることに成った。

所長には神崎驥一先生が就任され、所員には青木倫太郎、東普太郎、張源祥、大道安次郎、原田

脩一、池内信行、今田恵、石本雅男、小泉貞三、柏井象雄、片山正直、小松堅太郎、古武彌正、三戸寿、大石兵太郎、清水兼男、武内辰治、田村市郎の諸教授が任命された。

19年5月1日より正式に開所し、5月18日に研究所の講堂において開所式を行った<sup>34)</sup>。

(4) 小松堅太郎教授の辞任

このように5月1日に発足した「国民生活科学研究所」の所員として小松教授も大道教授ともに任命されているが、それからわずか三カ月後の8月、小松教授は関西学院を辞任して山形県へ帰省された。戦争中の財政危機は19年間にわたって在職し、すぐれた業績を残された小松先生を失うことに成ったのである。このことは関西学院の「社会学」にとって取り返しのつかない損失であった。

大正15年に就職して以来、19年間にすでに10冊にのぼるきわめてレベルの高い理論的著作を出版しておられ、さらに飛躍的な発展とその業績が期

(関西学院における社会学の歩み)

年次	大正 15年	昭和 2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
(文学部)	新明正道教授辞任	小松堅太郎先生就任	『社会学概論』				『社会構造の理論』 『知識社会学批判』 『理解的社会学』		『社会学』	となる 大学に昇格し法文学部				『民族と文化』	『新民族主義論』	『民族の理論』		『民族と世界史』	小松教授辞任	移籍 大道教授法文学部へ	小松『民族』			大道『国富論の草稿』 大道『スミス経済学の承譜』
(高等商業学部)						大道安次郎先生就任									『スミス経済学の生成と発展』		バジツト『国民の起源』							

33) 『関西学院70年史』190頁

34) 同上書 192頁

待される小松先生を辞任に追い込んだことはまことに非情であり悔んでも余りあるものがある。

小松先生は19年9月から1年間、山形県の郷里で過ぎたが、高田保馬先生が所長を兼ねていた文部省の「民族研究所」の所員に就任し、さらに21年4月には同志社大学文学部教授に迎えられた。しかし、不運にも23年5月には教職追放となり教壇を離れた。そこで3年間の受難の時期を過ぎたが、26年10月には追放解除となり、同志社大学法学部政治学科教授に復帰した。

その後も活発な研究を続け、すぐれた著書7冊を公刊されたが、昭和34年5月に逝去された。享年65才であった。

## むすび——二人の社会学者

19年8月に法文学部の社会学担当教授であった小松堅太郎先生が辞任されたので、その穴を埋めるため、本来、社会学専攻である高等商業学部の大道安次郎教授が法文学部の助教授として移籍した。

以上見て来たように、大正15年から昭和23年という時期は、まず大正15年から小松先生が専門部文学部教授職にあったのに対して、大道先生も5年おくれて高等商業学部の教授となられ、昭和19年の夏まで、同じ総合学園の別々の学部二人の社会学者が併存した時期であった。そこで最後にこの時期の二人の社会学者を比較してみよう。

### (1) 二人の人柄

小松堅太郎先生は山形県の農村の御出身であり、苦学力行によって明治大学を卒業され特選生になった。その頃、東京商科大学において教鞭をとっていた高田保馬先生に紹介されてその能力を認められ、後に高田先生が九州大学の教授に就任された際にその助手に採用されたが、翌年、関西学院専門部の文学部に就任された。その後、西宮、京都と長く都会で生活することとなったが、先生の人となりは、終生純朴な農民のそれであった。すなわち先生は生涯、朴訥でおよそ社交性とは無縁な方であった。大月名誉教授は「小松先生は学問一筋で、一般社会の社交儀礼に馴染まれなかつ

た。こんなことがあったと聞いた。年度始めに教授会の晩餐会があった。食後テーブルスピーチの時、最初に新参の小松教授が指名された。先生はそのような習慣に馴染まれず、田舎風に何か余興をやるのかと感違ひされて、デカンショ節を大声で歌われて皆を驚かされた。先生の稚気が今にして懐しく偲ばれる<sup>35)</sup>と書かれている。田舎風で朴訥な先生の面目躍如たるものがある。先生にはただ一筋の学問があるだけで、社交も処世術も眼中になかったし、巧言令色は最も恥ずるところであった。先生のこのような性格も一因となったのか、学院の幹部の覚えはあまりかんばんしかなかったようである。その為、19年の人員整理の際の犠牲となったのではないかと推定される。戦争中の危機であったとはいえ、純粹朴訥ですばらしい能力を持った小松先生を辞任のやむなきに至らしめたことは返すがえすも残念なことであった。

他方、大道安次郎先生は敦賀市の出身で家は海産物問屋であった。港町には自由な気風が強く、京都に近い先生は「みやび」でスマートなものを身につけていた。先生は生来、温厚で人と争うことが嫌いであり、ソフトな社交家であった。したがって万人に好まれるタイプであり、恩師に可愛がられ、多くの友人に恵まれた。九州大学を卒業した大道先生を高等商業学部採用したのは神崎院長であり、その後も極めて親密であった。また大道先生は趣味も広く、碁、将棋、マージャン、音楽、ゴルフなどを楽しまれ、これを通して親しい人間関係を創り出していった。

このように対比してみると、二人の人柄はきわめて対照的であったように思われる。小松先生が農村出身であって終生、土の香りを保持し続けており、人柄も朴訥であって社交性とは無縁の方であり、ただ学問一筋の方であったのに対して、大道先生の方は「みやび」た世界を求め、それが身についた方であった。趣味も広く、社交性に富み、おしゃれ好みの方であった。これはロータリアンでホテルを自分の応接室のようにして過していたことにも示されている。

### (2) 二人の学問的人脈

二人の学問的人脈は極めて近く、からみ合っ

35) 大月直治「学院の思い出——優れた学者 立派な講義——」関西学院『クレセント』18号 昭和60年6月 142-143頁

いたが、当人相互の関係は疎遠で、何故かしっくりいかなかったようである。

まず小松先生の場合には、これまで何度も述べたように、大正10年に高田保馬先生に会って指導を受けるように成り、大正14年、高田先生が九州大学の教授となるやその助手に採用され、大正15年には高田先生の推薦で関西学院に就任したが、19年に辞職したあと、20年には高田先生が所長を兼ねていた文部省の民族研究所に就任している。すなわち小松先生はただ一人高田保馬先生と密着していたといえる。小松先生にとっては高田先生は唯一の師であり人脈であった。

それに対して大道先生が最初に会った社会学者は新明正道教授であった。その後、九州大学で高田保馬先生に学んだ。さらに関西学院高等商学部に入職した後、大阪商大の堀経夫先生に師事し、イギリス経済学史を学んだ。しかも本稿で取扱った時期においては堀先生との関係が最も重要である。

したがって大道先生の人脈の基本は新明、高田、堀と三つあったといえよう。しかしながら、これら三人の恩師との関係のなかで、大道先生が最も親しく感じていたのは新明正道先生であった。

このように小松先生は高田先生と密着していたのに対して、大道先生の方は新明、高田、堀と多くの人脈をもっていた。

ところで高田——小松と新明——大道の人脈は決して疎遠なものではなかった。高田先生と新明先生は学問を通して当時から親しく交流していた。また先に述べたように、新明先生の後任に小松先生を推したのは新明先生御自身であった。それにもかかわらず小松先生と大道先生は何故かしっくりいっていなかったようである。高田博士と新明教授が理論的に対抗し合っていたことが影響したのかも知れない。

### (3) 二人の学問の性格

次に二人の学問的業績の特質を比較してみよう。まず専攻分野についてみると、小松教授は社会学の理論、民族論、国家論といった大規模な社会集団論に集中している。生涯に16冊ほどの著作を残されたが、ほとんどこれらの問題に関係したもののばかりである。

ところが大道先生の方は、この時期にはイギリス経済学史の研究に専念していたが、後にはアメリカ社会学史、老人研究、日本社会学史、都市研究と研究分野を広げていった。このように研究分野において二人は異なっていた。

次に二人の学問研究において最も得意とするものも対照的である。小松先生の業績はいずれも緻密でレベルの高い理論的研究であるのに対し、大道先生の最も得意とする研究分野は学史研究であった。大道教授は独自の理論社会学を書く意図をもっていたが、それは実現しないままに終わった。小松先生が独自の理論を創造する理論家であったのに対して、大道先生はその本領において学史家であったと筆者は考えている。

これと関連していることであるが、二人の業績を通読して感じることは、二人の業績の性格が大きく違うことである。

小松先生の業績がいずれもハードな感じを受けるのに対して、大道先生の業績はいずれもソフトな感じを与える。初期のイギリス経済学史研究以来、次第に円熟してソフトなものに成っている。

大正15年から昭和23年の間のこの時期は、文学部の小松教授と高等商業学部の大道教授が併存してそれぞれ違った学問分野ですぐれた業績を残した時期であった。

この時期には、いくつかの大きな出来事が生起している。一つは昭和4年の上ヶ原へのキャンパスの移転であり、次に昭和7～9年の大学昇格であり、さらに18～19年の戦争による学園の危機であった。

これらの大きな出来事のなかで、小松教授も大道教授もともに研鑽を積み、同じ関西学院の中で「社会学」を発展させて来たが、不幸にも、戦争拡大による学院の危機に直面して小松教授が尊い犠牲とされたのである。かえすがえすも残念なことであった。

若し小松教授が辞任されず大道教授とともに、戦後の社会学科および社会学部を構築していたならば、関西学院の社会学がさらに飛躍的に発展していたであろうことは疑いのないところである。これが実現しなかったことが悔まれてならない。